

【第111回生涯教育講座】

当施設における転落外傷の検討

に 科 まさ よし
仁 科 雅 良

キーワード：転落外傷，墜落外傷，頸椎損傷，高エネルギー外傷

要 旨

2015年9月までの30ヶ月間に当施設で診療した転落外傷260例について検討した。平均年齢は62.5歳。3例は来院時心肺停止状態であった。頭部顔面外傷がもっとも多かった。頸椎損傷が全体の5%であった。高さが4mを超えると重症例の頻度が高くなった。しかし、1m未満であっても重症例が2例みられた。死亡例も1例を除いて3m以下と高くなかった。高度が高くなくても慎重な診断・治療が必要である。

緒 言

高所からの転落は人体に大きな外力が加わり，思わぬ重症外傷を呈することは昔から知られている（図1）。救急隊の搬送においては，高エネルギー外傷として扱われる（表1）。しかし，その詳しい検討は少ない。今回，当施設における転落外傷について検討したので報告する。なお厳密には身体の一部が接地しながら落ちるものを転落，身体が完全に空中に浮いた状態で落ちるのを墜落というが，ここでは総称して転落とする。

対 象 と 方 法

2013年4月から2015年9月までの30ヶ月間に島根大学医学部附属病院救命救急センターで診療し

Masayoshi NISHINA

島根大学医学部救急医学

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部救急医学

徒然草

第一〇九段…高名の木登りといひし男、人を提て、高き木に登せて、梢を切らせしに、いと危く見えしほどは言ふ事もなくて、降るる時に、軒長（のきたけ）ばかりに成りて、『あやまちすな。心して降りよ』と言葉をかけ侍りしを、『かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。如何にかく言ふぞ』と申し侍りしかば、『その事に候ふ。目くるめき、枝危きほどは、己れが恐れ侍れば、申さず。あやまちは、安き所に成りて、必ず仕る事に候ふ』と言ふ。
あやしき下臈なれども、聖人の戒めになへり。鞠も、難き所を蹴出して後、安く思へば必ず落つと侍るやらん。

図1

た転落外傷338例のうち自転車走行中・15歳未満の症例を除く260例について，年齢・性別・転落場所・受傷部位・予後などについて retrospective に検討した。

結 果

260例の平均年齢は62.5歳で，男性176例・女性84例であった。救急搬送症例（救急車・ヘリでの